様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）
研究期間：2019～2023
課題番号：１９ＫＴ０００１

研究課題名（和文）対人援助とセラピーにおける対話実践の身体性と社会性：対話空間のオラリティ研究

研究課題名（英文）Embodiment and Sociality of Dialogical Practice in Human Service and Therapy: Studies in Dialogical Space and Orality

研究代表者
石原　孝二（Ishihara, Kohji）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：３０２９１９９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　13,800,000円

研究成果の概要（和文）：本課題はオープンダイアローグ(OD)、当事者研究、ACT(包括型地域生活支援)における対話実践の構造と伝播過程、伝播と社会的制度の関係に関する研究を行った。(1)対話実践の構造については、ODの対話実践の特徴、リフレクティングの構造、ACTの実践場面、対面とオンラインの会話構造の差異、当事者研究の要素の分析などを行い、(2)対話実践の伝播過程は、ODのトレーニングの経験やパターンランゲージの実践に関する分析と、語りと精神疾患の関係に関する研究を進めた。(3)対話実践の伝播と社会制度については、ODの制度的基盤や導入モデル、ODの思想の倫理性などを明らかにし、ODとACTの制度的な比較を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本でも大きな注目を集めるオープンダイアローグ、リフレクティングの対話の特徴や構造、制度的基盤、その思想の倫理性を明らかにしたことは、学術的に意義があるだけでなく、臨床、福祉、司法、教育など様々な支援現場における対話実践の理解に寄与するものである。また対面とオンラインの会話構造の差異の分析は、臨床や教育などの分野に大きな示唆を与える。さらに当事者研究における回復の捉え方や発見的要素・回復・運動的要素などに関する分析は、近年様々な分野に広がりつつある当事者研究の特徴を理解する上で重要な知見を与えるものだろう。

研究成果の概要（英文）：This study investigated the structure and diffusion process of dialogical practice, and the relationship between its diffusion and institutional settings with regard to Open Dialogue (OD), Tojisha-kenkyu and Assertive Community Treatment (ACT). (1) For the structure of dialogical practice, the characteristics of dialogical practice in OD, the structure of reflecting, the practice situations of ACT, the difference between face-to-face and online conversation structure, and the elements of Tojisha-kenkyu were analyzed; (2) For the diffusion process, the analyses of the OD training experience and pattern language practice, and the research on the relationship between narratives and mental illness were conducted. (3) Regarding the relationship between the diffusion of dialogical practice and institutional settings, we clarified the institutional foundations of OD, models for introducing OD, and the ethics of OD thought, and also made an institutional comparison between OD and ACT.

研究分野：科学哲学

キーワード：オープンダイアローグ　ACT　当事者研究　身体的相互作用　Open Dialogue

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の学術的背景、研究課題の核心をなす学術的「問い」

本研究はオープンダイアローグ(OD)、当事者研究、ACT（包括型地域生活支援）の対話実践を比較しながら、それぞれの効果や特徴、伝達過程などを明らかにすることを目的としていた。

オープンダイアローグは、1980 年代からフィンランランド・ケロプダス病院で開発されてきたアプローチである。対話による「治療ミーティング」を行うことに特徴があるが、地域のあらゆる機関と連携しながら対話的な治療を可能にする地域システムでもある。ACT は、1970 年代にマディソンモデルと呼ばれる地域精神保健システムの一部とし米国で開発され、自宅訪問を含む集中的かつ継続的なケアを行うものであり、日本では 2000 年代以降導入されてきた。当事者研究は、浦河べてるの家での 1980 年代からのユニークな実践を背景に 2001 年に始まった日本独自の活動であり、当事者が抱えるさまざまな課題を仲間や支援者と一緒に当事者自身が「研究者」となって研究し、その成果を共有するものである。

オープンダイアローグ、当事者研究、ACT における対話空間の構造・デザインはどのようなものなのか、対話実践の伝播を支える社会制度や社会的基盤はどのようなあり方をしているのか、また、音声言語を通じて実現される共在性のあり方（対話空間）が、対話実践の参加者にどのような影響をあたえ、そうした実践が社会制度やコミュニティのあり方とどのような関係にあるのかが本研究の中心的な問いであった。

２．研究の目的

本研究は対人援助とセラピーにおいて対話を重視するアプローチ、オープンダイアローグ、当事者研究、ACT の対話実践を比較しながら、対話実践の多様性と普遍的な構造を明らかにすることを目的としている。また、対話実践のアプローチの伝達や、地域や国を超えた伝播がいかにして可能となるのか、対話実践の伝達と伝播に文字媒体と社会的制度がどのように関わっているのかも研究テーマである。さらに、文章による教示によっては伝達することが難しいスキルや態度が「経験」を介することによってどのように伝達されていくのかを明らかにすることも試みる。この目的を達成するため、本研究は３つの領域、１．「対話実践の構造」、２．「対話実践の伝達プロセス」、３．「対話実践の伝播と社会制度」を設定して研究を進めることとした。

３．研究の方法

本研究は当初、以下のような研究計画を立てていた。

（１）対話実践の構造については、オープンダイアローグ、ACT、当事者研究に関する対面でのワークショップやフィールド調査を行い、エスノメソドロジー（会話分析）、身体的相互作用分析、パターン・ランゲージの作成などの多視点からの分析を行うとともに、対話実践参加者の脳機能計測や緊張度評価を行う。（２）対話実践の伝達プロセスについては、対面のワークショップなどを行い、ワークショップにおけるワークなどの「経験」を通じてしか伝達されない要素は何か、また理念や原則を説明した基本図書やガイドラインはどのような役割を果たすのかに注目して研究を進め、語りと精神疾患との関係の理解が対話実践の担い手にどのような影響を与えるのかについても考察する。（３）対話実践の伝播と社会制度については、OD、ACT、当事者研究がその発祥の地から、他の地域・国に伝わっていく伝播過程を研究対象とし、それぞれの発祥の地でのスタッフへの聞き取り調査を行うとともに、社会制度や文化背景が対話実践にどのように影響するのかを考察する。

しかし、研究初年度末から新型コロナウイルス感染症の拡大が始まり、流行が長期化したため、対面でのワークショップやフィールドワーク、対話実践の実験、訪問調査などを行うことが困難となった。そのため、対面でのワークショップに変えて、主として臨床経験やトレーニングの経験、オンラインでのワークショップ、文献調査などにもとづき、上記の 3 つの領域、対話実践の構造や伝播過程、社会的制度や文化背景の影響などを研究していくこととなった。研究分担者による会議を年 1～2 回開催し、最終年度は公開のシンポジウム「対話空間のオラリティ：オープンダイアローグ、当事者研究、相互行為をめぐって」や国際シンポジウム（後述）を開催した。

４．研究成果

研究成果は、それぞれの領域ごとに、発表論文の内容を中心として、一部書籍や学会発表の内容をもとに記述する。発表論文等の詳細は、「主な発表論文等」を参照されたい。(同一著者・同一の発表年の論文等は、リストの上から a,b,c を付して区別した。)

（１）　対話実践の構造

対話実践の構造については、オープンダイアローグの対話実践の特徴や、オープンダイアローグの対話実践の中核をなすリフレクティングの構造の分析などにおいて成果が得られた。また ACT の実践場面の分析や、対面的な会話とオンラインでの会話の構造的な差異に関する分析、当事者研究の要素の分析なども進めた。

オープンダイアローグは、1970 年代後半から 1980 代初めにかけてフィンランドのアラネンたちによって開発されたニード適合型治療(need-adapted treatment)を基盤とし、それを発展させたものである。石原（2019）は、ニード適合型治療において治療ミーティングは情報的・診断的・治療的機能をもつとされ、治療計画をたてるための診断的機能を保持していたが、オープンダイアローグにおいては、治療ミーティングそのものが治療の中心となり、治療ミーティングの治療空間への位置づけの変化がオープンダイアローグへの転換点となっていることを指摘した。また大井(2023)は、OD そのものが優れた心理療法であると同時に、患者や家族等のネットワークがもつ個別のニーズに対し適切なリソースを柔軟に動員するプラットフォーム機能を提供し続ける仕組みでもあることを指摘した。

斎藤(2021a)は集団精神療法とオープンダイアローグを比較し、オープンダイアローグが「対話の継続」のみを目指し、「治癒」や「改善」といった目的をもたないことが、集団療法との最大の相違点であることを指摘した。斎藤(2021c；石原・斎藤編 2022a 第 6 章)は、ラカン派の精神分析とオープンダイアローグを対比させながら、オープンダイアローグのプロセスに「目的を追求しなければ目的は達成できる」という逆説が通底し、オープンダイアローグの「対話実践」が、言語と主体の否定神学的な構造によって支えられていることを主張した。斎藤(2022)はまた、中井久夫の臨床とオープンダイアローグが、「ゴール志向」ではなく「プロセス志向」であることなどにおいて共通性をもつことを明らかにした。

リフレクティングに関しては、矢原の一連の論文が、リフレクティングの構造を明らかにすることに大きく寄与した。矢原(2020)は、リフレクティングにおける「話すこと（外なる会話）」と「聞くこと（内なる会話）」を丁寧に切り分けることが、会話の場を単一のダイアローグではなく、二つの自律した相互行為システムが互いのシステムの観察を観察する場へと飛躍させることを指摘し、リフレクティングの「ダイアローグ」を超えるラディカルさに関するいくつかの仮説を提示することを試みた。矢原(2021)は、リフレクティングについて、構造としてのリフレクティング・トークと、構造化としてのリフレクティング・プロセスという二つの相が一つの出来事に見出され、リフレクティング・トークには反復性と移転可能性という特質が、リフレクティング・プロセスには、更新性と文脈限定性という特質が確認されることを指摘した。

ACT に関しては、浦野(2021)において、ACT によるアウトリーチの支援場面のエスノメソドロジー的な分析を行い、精神障害をもつ人の自己認識をめぐる課題に対して地域精神医療がその実践において具体的にどのように対応しているのかを検討した。また支援者を媒介とした利用者と家族成員との間のコミュニケーションのあり方を「媒介された対話」として特徴づけ、そうしたコミュニケーションのあり方が、対立関係がある場合に直接的には困難な、利用者と家族成員との間の対話を媒介することを示した。浦野(2023)では、ACT を実施するチームによるカンファレンス場面分析することによって、地域精神医療の実践の論理として、①多様で広範な生活課題とトラブルを対象とすること、②こうした課題とトラブルを分散的で限定的な仕方によって把握すること、③このような限定的な把握の集積とその接合に基づいた分担が行われることを明らかにした。

Tanaka(2019)は、身体化された社会的相互作用における規範性を論じている。自己と他者との間の身体的な相互作用はそれぞれの意図を超えた自律的なプロセスを生み出し、そのようなプロセスが、他者の行為の有意味な知覚を可能にする暗黙の規範性を含んでいることを指摘した。田中・森(2022)は、現象学者メルロ＝ポンティの「間身体性」の観点を応用して、オンライン会議システムを利用して実践される会話が、対面での会話と、その対人コミュニケーションの質においてどのように異なるのかを明らかにすることを試みた。間身体性は、自己の身体と他者の身体とのあいだに潜在する相互的・循環的な関係性であり、非言語的コミュニケーションの同期や同調を通じて表出する。本論文では、対面での会話場面とオンラインでの会話場面の観察データを間身体性の観点にもとづいて比較・分析する作業を通じて、両者の質的な差異を明らかにした。また田中(2024)は、対面の場合は身体・空間を通じて形成される場の自律性に沿って会話が進行するが、オンラインの場合は個別の発話者の独立性が高く、発話行為もより自覚的に遂行されることから、オンライン授業が、対話、議論、話し合いなど、言語を通じて連想や考察を広げる作業には向いていること、オンライン授業は、少人数ならディスカッション能力の向上に役立つ可能性があるが、大人数での利用はいまだ難しい点を含むことを指摘した。

熊谷(2020)は、自閉スペクトラム症研究を例に、発見と、回復・運動という二つの要素をあわせもった当事者研究の最新動向と、多分野の研究者との協働によって、知識や支援法の共同創造が始まりつつある現状を紹介し、当事者研究の誕生の背景、当事者研究における回復の捉え方、当事者研究の発見的要素、回復・運動的要素、当事者研究と他の当事者活動、当事者研究とアカデミアとの協働に関する将来展望について論じ、当事者研究の基本的な特徴と構造、他の活動との関係などを明らかにした。

（2） 対話実践の伝播過程

対話実践の伝播過程に関しては、オープンダイアローグのトレーニングの経験や介護現場におけるパターン・ランゲージの実践、公認心理士・臨床心理士養成課程における実践、精神科病院と少年院におけるリフレクティングの取り組みに関する分析が行われたほか、語りと精神疾患との関係の理解に関する研究が進められた。

① 対話実践の伝播過程に関する成果

大井(2024)は、著者の日本の基礎トレーニングコースでのトレーナーとしての経験やヘルシンキでのトレーナー養成プログラムでのトレーニーとしての経験，そして対話の臨床実践を踏まえ、ダイアローグにまつわる筆者自身のナラティヴにおいて何が起きてきたのかを言語化することを試みたものである。「人間性の全体性が制限された状態（人間性の剥奪）」が組織における様々な困難に共通する課題であり、この課題を解く糸口としての可能性を秘めているのが「対話」であることを示唆している。また大井(2022)は、オープンダイアローグにおける対話空間の創造について述べるとともに、対話的な場を作り、感情の機微に触れ、寄り添いながら、支えあえる場を作ることは、オンラインでも可能であることを指摘した。

井庭研究室では、パターン・ランゲージの研究一般と介護分野における実践を行った。パターン・ランゲージとは、ある領域において、良い結果をもたらす本質的なコツ（経験に共通するパターン）を記述する言葉の集まりである。Iba(2019)は、パターン・ランゲージの歴史や作成方法、学習パターンを利用した対話的ワークショップなどの実践の結果などを紹介した。金子・荻原・小川・井庭(2024)は、井庭研究室と社会福祉法人いきいき福祉会との共同プロジェクトにより、『対話のことば：オープンダイアローグに学ぶ問題解消のための対話の心得』（井庭崇・長井雅史,、丸善出版m2018）のパターン・ランゲージを用いたオンライン研修を実施し、参加者の学びや関係性構築における効果を検証した。この研究では、認知症ケアと高齢者ケアの現場において、パターン・ランゲージがもたらす新しい視点と実践方法の可能性を示唆された。また、これらの言語化された実践がいかにして介護職員のコミュニケーションとケアの質を向上させるかについても考察が加えられた。

福井・島田・木下(2024)は、公認心理師・臨床心理士養成大学院において、「人としてのセラピスト養成モデル（Person of the therapist (POT) training model）」の一部を試行的に取り入れた実践を報告し，意義と課題を検討した。

矢原・大嶌・小林(2020)は、熊本の精神科病院で 2018 年 4 月から 5 か年計画で行われていた「制度分析」としてのリフレクティング・プロセスの取り組み（リフレクティング研修プロジェクト、リフレクティング研究プロジェクト、院内協働推進室）に関する協働的実践研究を紹介している。また矢原(2022)は、福岡少年院におけるリフレクティングの取り組みについて、F,ニューマンと L.ホルツマンの《道具と結果》方法論と A.ベルクの風土論を参照しながら、対面的相互行為の域を超えて、矯正施設の風土を更新していく活動として理解することを試みた。

② 語りと精神疾患との関係の理解に関する研究の成果

糸川(2022a)は、私たちが用いる言語が果たす役割について検討し、神経衰弱概念が国境を超え時代を経て変遷した意味について述べるとともに、身体疾患と精神疾患の差異を、「類型」（症候群）と種（疾患）との関係という観点から論じた。糸川(2022b)はまた、エビデンス重視の医学界で症例報告の価値が低くみられる理由を，エビデンスに基づく医療（EBM）が医療経済政策的な要請に応えようとし、医療の科学化を目指しているという観点から解説した。また精神疾患がほかの診療科疾患と異なり類型であることから，精神疾患の症例報告には精神医学固有の意義があることを主張した。

浦野(2023)は、「多重性人格障害」に関する偽記憶論争に対するハッキングの議論を参照しながら、精神医学の概念を用いて自己を理解することについて論じている。同論文は、何らかの異変に診断概念を当てはめることは、その異変をめぐる責任を誰かに帰属し、追求することであり、この概念を使用する権限が専門家と非専門家の間で非対称的に分配されているため、非専門家がこの概念を自己に適用することに対して、道徳的評価（従属性と非自律性）が与えられる可能性があることを指摘した。

北中(2021)は医療人類学的視点に基づいて，バイオロジー，精神療法，精神病理学が，それぞれどのように異なる共感的まなざしを生み出してきたのかについて論じるとともに、そのような治療者のまなざしが，当事者の意識のみならず病の経験そのものをも変化させる現象を，（ハッキングの理論を援用しながら）「相互作用種」として分析した．また，日本の精神科臨床が生み出した共感の形について考察し，神経科学的転回を経たバイオロジーの言葉の変化を考え、さらに、当事者との協働が，今後どのように新たな共感的言語を生み出しうるのかについて考察した。北中(2022)は、精神医学を主観と客観の往復運動としてとらえなおし、当事者の「主観復権」への流れを、（１）北米の医学教育における「病の語り」運動にみられる医師による物語化、（２）英国のユーザー主導運動をはじめとする当事者運動などにみられる当事者による法則化、（３）「セルフ・トラッキング」などにみられるデータ医療をめぐる物語化と法則化の相互作用という視点から検討した。

石原(2020)は「反精神医学」とされるサースやレインの思想、現象学的精神病理学、オープンダイアローグの思想を当事者の経験への接近や精神医療における強制性という視点から比較しし、石原(2021)は、「反精神医学」や批判的精神医学、PTMF(Power, Threat, Meaning Framework)、オープンダイアローグ、WHO が推進する人権モデルを比較しながら、精神医学における診断の意義のゆらぎについて論じた。また石原(2024)は、PTMF を「メンタルヘルスケアの社会化」の動きの中に位置づけながらその意義を論じることを試みた。

（３） 対話実践の伝播と社会制度・文化

対話実践の伝播と社会制度については、オープンダイアローグや ACT の制度的基盤や導入のモデル、その思想の倫理性や強制性との関係などを明らかにした。また、国際シンポジウムなどを通じて、日本とアジア（韓国と台湾）におけるオープンダイアローグと当事者研究の導入の状況について報告・意見交換を行った。

Ishihara, Saito & Oi(2020)は、オープンダイアローグに関する国際研究会議において、日本におけるオープンダイアローグの導入の歴史と現状、日本の精神科医療の特徴とオープンダイアローグ導入の障壁、トレーニングの状況などを紹介した。石原（石原・斎藤編 2022b 第 1 章）は、オープンダイアローグの開発の背景に、自治体と医療区に大きな裁量権が与えられてきたフィンランドの医療制度、フィンランドにおける脱施設化政策、開発者たちによる研究の重視などがあることを明らかにした。また日本における精神科における導入を阻むものとして、日本の医療保険体制、精神科病院中心の日本の精神科医療、標準的な治療と治療思想を指摘し、現在の日本におけるオープンダイアローグの治療やケアの実践の導入は、部分的・限定的なものとなり、オープンダイアローグを標榜する実践が既存の精神医療の抑圧的なシステムの中に組み込まれていく危険性があることを指摘した。また石原(2022)は、オープンダイアローグの世界的な広がりと日本におけるトレーニングの状況について整理するとともに、「オープンダイアローグの導入」について議論する際には、「西ラップランドモデル」（1990 年代の西ラップランドにおける実践のモデル）、「7 つの原則モデル」（7 つの原則すべてに沿った実践の導入）、「部分的適用モデル」を区別する必要があり、ほとんどの国・地域において、現状では部分的適用モデルを適用せざるを得ないことを指摘した。

斎藤(2020)は、オープンダイアローグの思想は，ポストモダンの思想に依拠した「人間」と「主体」の復権でもあり、その根底には，個人の尊厳，権利，自由の尊重こそが治療的意義を持つという透徹した倫理性があることを指摘した。斎藤(2021b)は、オープンダイアローグの原則の一つである「不確実性への耐性」を対話におけるメタ倫理として捉える見方を提示し、斎藤(2024)はオープンダイアローグをユマニチュードやハームリダクションなどとともに「新しい人間主義」にもとづくアプローチとして位置づけた。

論文発表・学会発表とはなっていないが、石原「オープンダイアローグと ACT：制度的基盤とその実現困難性–困難さの中で何ができるのかを考える」（オープンダイアローグと ACT：制度的側面から考える／2024 年 3 月 13 日オンライン)では、ACT の世界的な広がりと、日本での導入の困難さに関する制度的基盤（診療報酬上の問題）を指摘するとともに、ACT はオープンダイアローグと共通する特徴をもちつつも、服薬管理を重視することにおいてオープンダイアローグとは異なった特徴をもつことや、強制性の問題が指摘されてきたことを示した。

Kitanaka(2021)は、日本における認知症の捉え方が、2000 年代の認知症当事者による活動などによって、「共感」や「同情」から「権利」を基盤に据えたものへと変わっていったこと、また、認知症当事者のそうした活動が、社会的関係性の維持に共感に大きな役割が与えられている日本社会の基礎に疑問を投げかけるものであり得ることを指摘した。

当事者研究については、向谷地が、2020 年度から 2022 年度までオンラインイベントとして当事者研究の実践報告会（研究・実践交流プログラム）」を開催し、司法、精神医療、福祉、就労支、教育、子供・家庭など様々な分野における当事者研究の実践と研究の交流の場を提供した。最終年度には北海道大学を会場として、ハイブリッド形式で、国際会議「精神医療における『対話実践の社会的実装を考える国際シンポジウム』－オープンダイアローグと当事者研究というインパクト－」(International symposium on social implementation of dialogue practice)を開催した。本シンポジウムでは、オープンダイアローグの開発に中心的にかかわったヤーッコ・セイックラ氏による講演や、韓国、台湾、日本における当事者研究とオープンダイアローグの導入への取り組みや展開の状況についての報告があり、当事者研究とオープンダイアローグの特徴の比較や、今後の実装の展望などが議論された。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計29件（うち査読付論文　7件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 石原孝二	４．巻 24(3)
２．論文標題 PTMFとメンタルヘルスケアの社会化	５．発行年 2024年
３．雑誌名 臨床心理学	６．最初と最後の頁 287-292
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大井雄一	４．巻 15
２．論文標題 心の安全衛生――対話が組織に人間性を還流する	５．発行年 2024年
３．雑誌名 ナラティヴとケア	６．最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 大井雄一	４．巻 52(4)
２．論文標題 オープンダイアローグで統合失調症の予防は可能か？	５．発行年 2023年
３．雑誌名 臨床精神医学	６．最初と最後の頁 385-392
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤環	４．巻 126(2)
２．論文標題 オープンダイアローグの実装とその展望	５．発行年 2024年
３．雑誌名 精神神経学雑誌	６．最初と最後の頁 79-89
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.57369/pnj.24-016	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石原孝二	4．巻 21
2．論文標題 G.ドゥヴルー(Devereux)のethnic psychosis と相補性の概念：学際性と多元主義.	5．発行年 2023年
3．雑誌名 こころと文化	6．最初と最後の頁 139-145
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石原孝二	4．巻 27(5)
2．論文標題 オープンダイアローグの導入モデル	5．発行年 2022年
3．雑誌名 最新精神医学	6．最初と最後の頁 337-343
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢原隆行	4．巻 155
2．論文標題 立ち直り支援をめぐる二つの隘路と矯正施設のリフレクティング	5．発行年 2022年
3．雑誌名 熊本法学	6．最初と最後の頁 61-84
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北中淳子	4．巻 124(9)
2．論文標題 主観性のテクノロジーとしての精神医学 ： 医療人類学的視点	5．発行年 2022年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 637-644
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 田中彰吾・森直久	4．巻 4(1)
2．論文標題 間身体性から見た対面とオンラインの会話の質的差異	5．発行年 2022年
3．雑誌名 こころの科学とエピステモロジー	6．最初と最後の頁 2-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50882/epstemindsci.4.1_2	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 糸川昌成	4．巻 21(1)
2．論文標題 疾患的なものと疾患的ではないもの‐類型の変遷をめぐって	5．発行年 2022年
3．雑誌名 こころと文化	6．最初と最後の頁 8-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 糸川昌成	4．巻 51(2)
2．論文標題 精神医学における症例報告の意義	5．発行年 2022年
3．雑誌名 臨床精神医学	6．最初と最後の頁 133-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤環	4．巻 37(10)
2．論文標題 中井久夫の仕事とオープンダイアローグ	5．発行年 2022年
3．雑誌名 精神科治療学	6．最初と最後の頁 1049-1054
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石原孝二	4．巻 50(7)
2．論文標題 診断と精神医学	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床精神医学	6．最初と最後の頁 681-686
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢原隆行	4．巻 21(3)
2．論文標題 治療構造のリフレクティング：反復（タクト）でなく更新（リズム）のために	5．発行年 2021年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 310-314
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 浦野茂	4．巻 4
2．論文標題 精神科訪問支援場面における「媒介された対話」の構造：地域生活支援のエスノメソドロジー	5．発行年 2021年
3．雑誌名 現象学と社会科学	6．最初と最後の頁 43-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 北中淳子	4．巻 123
2．論文標題 共感の技としての精神医療―医療人類学的視点―	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神神経学雑誌	6．最初と最後の頁 576-582
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Junko Kitanaka	4．巻 57(3)
2．論文標題 Limits of empathy: The dementia tojisha movement in Japan	5．発行年 2021年
3．雑誌名 The History of the Behavioral Sciences	6．最初と最後の頁 266-272
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1002/jhbs.22098	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤環	4．巻 36(11)
2．論文標題 オープンダイアローグは集団精神療法か?	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神科治療学	6．最初と最後の頁 1265-1270
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤環	4．巻 63 (10)
2．論文標題 統合失調症に対するオープンダイアローグ-メタ倫理としての「不確実性の耐性」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 精神医学	6．最初と最後の頁 1545-1553
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 斎藤環	4．巻 38(1)
2．論文標題 「否定神学」の復権へ ：「ラカン」と「オープンダイアローグ」	5．発行年 2021年
3．雑誌名 家族療法研究	6．最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石原孝二	4．巻 134(807)
2．論文標題 現象学的精神病理学と反精神医学を考える	5．発行年 2020年
3．雑誌名 哲学雑誌	6．最初と最後の頁 1～15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢原隆行	4．巻 37(1)
2．論文標題 ビヨンド・ダイアローグ：リフレクティングのラディカルさをめぐる覚書	5．発行年 2020年
3．雑誌名 家族療法研究	6．最初と最後の頁 19~25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 矢原隆行，大嶌高昭，小林幹穂	4．巻 37(3)
2．論文標題 制度分析としてのリフレクティング・プロセス：熊本における活動	5．発行年 2020年
3．雑誌名 家族療法研究	6．最初と最後の頁 38~44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 石原孝二	4．巻 19(5)
2．論文標題 診断から対話へ：ニード適合型治療からオープンダイアローグへの転換点	5．発行年 2019年
3．雑誌名 臨床心理学	6．最初と最後の頁 546-550
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 斎藤環	４．巻 49(1)
２．論文標題 オープンダイアローグ実践の基本原則	５．発行年 2020年
３．雑誌名 臨床精神医学	６．最初と最後の頁 103-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計53件（うち招待講演　30件／うち国際学会　15件）

１．発表者名 田中彰吾
２．発表標題 対面とオンラインの会話の質的差異から考えるオンライン授業の意義
３．学会等名 北海道大学研究集会2023「ポストコロナ時代の言語教育におけるオンライン授業と翻訳AI・生成AIへの対応に関する研究（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 金子智紀，荻原満寿美，小川泰子，井庭崇
２．発表標題 介護現場におけるパターン・ランゲージの活用事例: 社会福祉法人いきいき福祉会の事例紹介
３．学会等名 The 10th Asian Conference on Pattern Languages of Programs, People, and Practices (AsianPLoP 2024)（国際学会）
４．発表年 2024年

１．発表者名 福井里江，島田愛子，木下由希
２．発表標題 公認心理師・臨床心理士養成大学院における「人としてのセラピスト養成モデル （Person of the therapist (POTT) training model）」の試行的実施
３．学会等名 日本家族療法学会第41回福岡大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 大井雄一
２．発表標題 オープンダイアローグに学ぶ、対話空間の創造
３．学会等名 第29回日本産業精神保健学会　シンポジウム５「支え合える職場をつくる！～対話の基本回帰とDX推進の可能性に向けて～」
４．発表年 2022年

１．発表者名 Kohji Ishihara, Tamaki Saito, Yuichi Oi
２．発表標題 Implementation and Training of Open Dialogue Approach in Japan: Current Situation and Challenges
３．学会等名 3rd Meeting of the International Open Dialogue Research Collaboration（国際学会）
４．発表年 2021年

１．発表者名 Takashi Iba,
２．発表標題 Creating Pattern Languages for Creating a Future where We Can Live Well
３．学会等名 INTERSECTION19 (Designing Enterprises for Better Futures) Conference in Lisbon, Portugal（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Shogo Tanaka
２．発表標題 On the normativity that emerges through embodied social interactions
３．学会等名 Workshop on phenomenology at the Institute of Philosophy (Prague, Czech)（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計6件

1．著者名 矢原隆行	4．発行年 2023年
2．出版社 青土社	5．総ページ数 440
3．書名 リフレクティングの臨床社会学: ケアとダイアローグの思想と実践	

1．著者名 浦野茂	4．発行年 2023年
2．出版社 ちとせプレス	5．総ページ数 -
3．書名 佐藤貴宣・栗田季佳編著『障害理解のリフレクション：行為と言葉が描く＜他者＞と共にある世界』（「精神医学の概念を用いて自己を理解すること：文化的環境、行為の遡及的再記述、道徳的評価」）	

1．著者名 浦野茂	4．発行年 2023年
2．出版社 勁草書房	5．総ページ数 -
3．書名 小宮友根・黒嶋智美（編著）『実践の論理を描く：相互行為のなかの知識・身体・こころ』（「地域精神医療の実践の論理：カンファレンスの検討から」）	

1．著者名 石原孝二、斎藤環（編）	4．発行年 2022年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 200
3．書名 オープンダイアローグ　思想と哲学	

１．著者名 石原孝二、斎藤環（編）	４．発行年 2022年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 208
３．書名 オープンダイアローグ　実践システムと精神医療	

１．著者名 熊谷晋一郎	４．発行年 2020年
２．出版社 岩波書店	５．総ページ数 280
３．書名 当事者研究―等身大の＜わたし＞の発見と回復	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	向谷地　生良 (Mukaiyachi Ikuyoshi) (00364266)	北海道医療大学・看護福祉学部・特任教授 (30110)	
研究分担者	熊谷　晋一郎 (Shinichiro Kumagaya) (00574659)	東京大学・先端科学技術研究センター・准教授 (12601)	
研究分担者	北中　淳子 (Junko Kitagawa) (20383945)	慶應義塾大学・文学部（三田）・教授 (32612)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	糸川　昌成 (Masanari Itokawa) (40332324)	公益財団法人東京都医学総合研究所・精神行動医学研究分野・副所長 (82609)	
研究分担者	井庭　崇 (Takashi Iba) (40348371)	慶應義塾大学・総合政策学部（藤沢）・教授 (32612)	
研究分担者	田中　彰吾 (Shogo Tanaka) (40408018)	東海大学・現代教養センター・教授 (32644)	
研究分担者	斉藤　環 (Tamaki Saito) (40521183)	筑波大学・医学医療系・教授 (12102)	
研究分担者	矢原　隆行 (Takayuki Yahara) (60333267)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（法）・教授 (17401)	
研究分担者	浦野　茂 (Shigeru Urano) (80347830)	三重県立看護大学・看護学部・教授 (24102)	
研究分担者	福井　里江 (Satoe Fukui) (80376839)	東京学芸大学・教育学部・准教授 (12604)	
研究分担者	大井　雄一 (Yuichi Oi) (90516056)	筑波大学・医学医療系・客員研究員 (12102)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計2件

国際研究集会	開催年
The 13th Keio Symposium on Bridging Humanities, Social Sciences and Medicine: Frontiers of Medical Anthropology and Transcultural Psychiatry	2019年～2019年
国際研究集会 精神医療における 『対話実践の社会的実装を考える国際シンポジウム』 －オープンダイアローグと当事者研究というインパクト－/ International symposium on social implementation of dialogue practice	開催年 2024年～2024年

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関